

中小企業の労働者や一人でも加盟できる
コミュニティニオンの札幌地域労組（札幌市北区）の副委員長で名物オルガナイザー・鈴木一氏の初の著書『小さな労働組合勝つためのコツ』（寿郎社）が刊行された。一九九〇年から専従を務め、一五〇もの組合結成を手がけてきた名物オルガナイザーが、その裏側・手の内を明かす内容だ。同労組の組合員数・組合結成数は全国のコミュニティニオンの中でトップレベルを誇る。直近で手がけた事案では、生キヤラメルで知られる花畑牧場（中札内村）のベトナム人労働者の労働紛争の事件が記憶に新しい。寮の水道光熱費の値上げに抗議した事実上のストライキを理由に、リーダー格の従業員が損害賠償と名誉毀損で訴えられた事案だ。

人づてで相談を受けた鈴木さんは、彼女たちのいる帯広市に吹雪の中を駆けつけ、その後、札幌地域労組に個人加盟させた。会社側と団体交渉を行い、雇い止めと名誉毀損を撤回させる和解を勝ち取った。さらに、タレントとして著名人である社長が直接謝罪、解決金を支払った。企業が有名だったこともあり、トラブルや和解は逐一全国ニュースで報じられた。

同書では「自らの労働条件の不当性に納得せず、異国の地でストライキに立ち上がったことに、私はとても感動しました」

心強い・心優しき用心棒

と、当時の状況を振り返っている。ベトナム人の労働者に対し、日本国憲法が保障する団結権やストライキ権について図解で説明したという。何より、ストライキという、不当な扱いを受けた際に抵抗のために立ち上がるのは人類普遍の権利だと説いた。まさに、労働運動の根源だろう。

不安定な雇用、実質賃金の止めどない低下など、労働者の環境は厳しくなる一方だが、労働組合全体が労働者の信頼を得ているわけではない。厚生労働省の調査では、二〇二一年六月時点の組合加盟率は一六・九％となり、前年比〇・二ポイント減と長期的な低減傾向が続く。パートタイム労働者では推定八・四％と、統計を取り始めた一九九〇年以降はじめて前年比を割った。

鈴木さんは著書の中で「名ばかり組合」を批判する。「労働組合の多くが不祥事が起きてそれを告発したり防止しようとしたりせず、傍観するだけの名ばかり組合である」「本当の意味で政府や資本をけん制・対峙するような労働運動がこの国ではほとんど無くなった」と。経営者側に対して物わりの良い組合の存在がもたらすのは、組合への信用低下、ひいては社会全体の抵抗力の低下だ。

実際に、労働組合の役割は個別の労働紛争の解決だけではない。多くの組合が、労働者が戦場に駆り出されることを前提とする戦争に反対する立場で反戦平和に関わる問題、札幌であれば五輪招致など地域課題を扱う市民運動に積極的に参加している。鈴木さんが組合専従としての心得を「地域や職場で泣いている人はいないか」と記すように、そのフィールドは広い。市民による民主主義社会の土壌の一つとして労働組合が存在している。

過去、札幌地域労組を取材した時の気持ちを本書を通して思い出した。心強くも心優しい「用心棒」がいることへの一労働者としての安心感。平均年齢二九歳による組合結成と二四時間ストライキ、団交を通して新型コロナ対策を徹底させた福祉法人、言語の壁に悪戦苦闘をしながらベトナム人技能実習生を救った手法――。記された実例は労働者としては勇気づけられるし、経営者や労務管理者も労務対策として一読の価値があるかもしれない。

過去には名物オルガナイザーが去った後、力が衰えてしまった組合の例もある。だが、札幌地域労組では若手が鈴木さんのもとで目下成長中だという。今回の出版も、若手から経験をまとめてほしいとの要望が発端になった。北海道の労働運動、そして市民運動の礎を担い続けてほしい。

△限▽